

テレビ放送のスポーツ番組が青少年のスポーツに関する 情意形成や知識獲得に及ぼす影響について

佐藤 正伸

国际武道大学体育学部

1. 緒 言

昨今、「見て楽しむ」というスポーツ愛好者が増えている。この場面はさまざまであるが、多くの人にとって、テレビ放送でのスポーツ競技会の実況放送（以下「スポーツ番組」と略す）は主要な機会である。また、テレビ局にとってもスポーツ番組は視聴者を獲得する重要なコンテンツとなっている。必然的に、多くのスポーツ番組が競合し、各テレビ局は視聴者を獲得するために過度な演出をすることがある。

この演出に対して、スポーツ界からは、スポーツ文化の健全性の保持、とりわけ青少年への悪影響に懸念の声がある。例えば、特定選手の奇抜な行動が話題になると、その行動の真似をする青少年が増えることがある。また、演出の煽動によって、良識が欠如するスポーツ観戦者が出現し、選手のプライバシー侵害などから、競技成績にマイナスの影響を生じさせることなども報じられている。

しかし、スポーツ番組の演出を一概に批判することもできない。実際、多くの視聴者を獲得したスポーツ種目では社会的注目が高まり、当該スポーツ種目界全体にさまざまな便益をもたらしている。逆に、そうでないスポーツ種目では便益が得られず、当該スポーツ種目界の活動が衰退することもある。それ故か、スポーツ種目界側からテレビ局に対して、放送姿勢の修正を求めるることは少ない。

ところで、芸能番組や娯楽番組の中には、「青少年に悪影響を及ぼしている」と批判されるものがある。しかし、そういった番組も大衆文化の一側面であり、法律に抵触していたり、反社会的な内容でない限り、番組を除去することはできない。したがって、保護者や教育関係者は、「見てはいけない」や「まねしてはいけない」という指導を施し、悪影響の除去や修正を行う。

スポーツ番組についても同様な措置が可能、かつ必要ではないだろうか。仮に、スポーツ番組が青少年に悪影響を与えていたならば、体育・スポーツ指導によって修正するほかない。もちろん、効果があるならば、それを効率的に誘引すべきである。

そこで、本研究では、問題意識の原点である、スポーツ番組が青少年に及ぼす影響について現状把握を行う。なお、今回は現状把握を目的とするが、筆者の究極的な目的は、これを基礎知見とし、悪影響の修正策や効果の誘引策を講じることである。

ところで、本研究はスポーツ経営学に属するが、当該領域では、スポーツ観戦について視聴者や観戦者を増加させる策を講じる視座、すなわち「量的增加」の考察が主である。この動向を批判することはしないが、これらの策に誘引された視聴者や観戦者が、時としてスポーツ文化の健全性の保持に悪影響を及ぼすことは前述したとおりである。したがって、スポーツ番組が視聴者に及ぼす影響を経営成績と捉え、その現状把握に基づき、悪影響の修正策や効果の誘引策を講じようとする視座、すなわち「質的向上」の考察は、スポーツ観戦をめぐる当該研究領域の補墳と考える。

2. 研究方法

2.1. 調査方法

本研究は、スポーツ番組が青少年に及ぼす影響をアンケート調査によって検証する。その実施方法を以下に記す。

2.1.1. 対象としたスポーツ番組

調査は2005年7月から8月に開催された「国際陸上競技連盟世界選手権2005年大会（以下「世界陸上」）」の放送を対象とした。本大会は、1997年大会からホスト放送局が代わり、従前に比し競技シーンを割愛して選手のプライベート映像を映すなど、過度な演出や脚色が目立っている。当然、競技関係者からの苦言が聞かれるが、他方、視聴率は毎大会20%前後を保持しており、陸上競技の社会的注目度を向上させたことも明白である。すなわち、青少年への影響が懸念される状況下にある。

2.1.2. アンケート調査対象者

アンケート調査は首都圏にある学校に在籍する中学生（3校）、高校生（5校）、大学生（5校）を対象者とした。各校教員の協力により、手渡しによって配布し、郵送によって回収した（一部、教員によって回収した）。2005年9月～11月に配布と回収を行った結果、4300部（中学生1000部、高校生2000部、大学生1300部）の配布に対し、2116部を回収（中学生639部、高校生1175部、大学生302部）した。回収率は49.2%となる（中学生63.9%、高校生58.7%、大学生23.2%）。

2.1.3. 質問項目の設定

本調査の主要概念である「スポーツ番組が青少年に及ぼす影響」は、もちろん、悪影響と効果（好影響）の両面がある。このうち、悪影響については、「青少年がスポーツ番組をどのように捉えているか」という側面に着目した。すなわち、多くのスポーツ番組がエンタテイメント化する中、スポーツ文化の健全性の保持という見地からすれば、「スポーツ番組を見る」という行為に「娯楽」だけではなく、「鑑賞」という機能を期待するところである。言い換えれば、ただ興奮や感動をあじわうだけではなく、スポーツの技術体系や発展過程などに関する理解を深めて欲しいものである。そこで、そういう傾向が青少年の中にあるのか否かを検証した。具体的には、「視聴に際する期待」と「演出に対する是非」の各側面から測定した。

一方、効果（好影響）については、「陸上競技に関する新知見の獲得」「陸上競技やスポーツに対する情意の形成」「陸上競技に対するイメージの変化」の各側面から測定した。なお、イメージの変化については、その現象が好ましいか否かについての言及は難しいため、今回の調査では「イメージ変化が生じているか否か」に主眼をおいた。

上記の質問については、各質問趣意について複数の項目を設定し、そのなかから各自の状況にあてはまる事項を選択する（該当する項目に○印をつける）形式をとった。詳細は、各報告の項に記述する。なお、調査では「スポーツ番組が青少年に及ぼす影響」の他、個人属性（性、学校種、競技スポーツ経験、陸上競技経験）、番組視聴の切っ掛け、視聴量（視聴日数、視聴時間）も測定した。

2.2. 分析方法

主要概念である「スポーツ番組が青少年に及ぼす影響」について、全体傾向と回答者の個人属性（学校種、性、陸上競技経験）による特徴を検証した。この際、各個人属性には、「中学→高校→大学」、「男→女」、「陸上競技経験者→非陸上競技経験者」の比較対照群を設定した。

個人属性による特徴は「内容」と「程度」の二面から捉えた。まず、「内容」である。これは、質問趣意ごとの各項目について、選択者割合の大小から序列をつけ、比較対照群によって序列が「似通っているか」を検証した。この場合、序列が似通っているならば、「個人属性に関わらず、内容は似ている」と考えられる。なお、統計処理は「スピアマンの順位相関係数」を用いた。また、文面の都合から、統計結果の詳細な提示は割愛し、結果の解釈のみを報告する。

次に、「程度」である。これは、比較対照群ごとに選択者と非選択者の割合を算出した後、「比較対照群」と「選択→非選択」の変数間の関連性を検証した。この場合、変数間に関連性があるならば、

「個人属性によって、程度に違いがある」と考えられる。なお、統計処理は「ピアソンのカイ二乗値」を用いた。また、文面の都合から、統計結果の詳細な提示は割愛し、選択者の割合と有意水準の結果のみを報告する（非選択者の割合は100%から選択者の割合を減じた値となる）。

3. 結果と考察

3.1. 「スポーツ番組の捉え方」について

前記の通り、「スポーツ番組の捉え方」は「視聴に際する期待」と「演出に対する是非」の各側面に着目した。

3.1.1. 全体傾向と学校種による違い

表1に、「スポーツ番組の捉え方」に関する全体傾向と学校種による違いの結果を示す。なお、上段に「視聴に際する期待」の、下段に「演出に対する是非」の結果を示した。

3.1.1.1. 「視聴に際する期待」について

本件は、10項目の「視聴に際する期待」を設定し、自身の気持ちがあてはまる場合に○印をつける形式で実施した。なお、世界陸上を見なかった者にも、「もし、見たならば」と仮定して回答を求めた。この全体傾向と学校種による違いは表1（上段）に示す。

全体傾向をみると、「予想できない劇的シーンを見たい」が1位、「感動をあじわいたい」が3位と、興奮や感動といった精神的充足を求めていると考えられる。もちろん、感動や興奮を与えることはスポーツ観戦の重要な機能であり、この期待傾向を問題視する必要はないだろう。しかし、鑑賞に関する内容については、「高度な競技能力を見たい」という項目こそ2位であったが、「陸上競技に関する知識を得たい」や「選手の個人データを知りたい」という項目は下位であり、鑑賞という趣意の視聴をしようとする者は少ないと考えられる。

次に、学校種による違いをみてみる（表1（上段・右側））。まず、内容（序列）の違いである。結果として、学校種ごとの序列は「似通っている」と考えられた。その上で「若干の違い」を挙げるとすると、例えば、中学生と高校生で1位の「予想できない劇的シーンを見たい」が大学生では3位、逆に、大学生で1位の「感動をあじわいたい」が中学生と高校生では3位であった。これらのことから、若干であるが、中学生や高校生は興奮を、大学生は感動を求める傾向があると推察される。

次に、程度（割合）の違いである。表記する結果のように、8項目において「学校種」と「選択－非選択」の変数間に関係があると考えられた。したがって、これらの項目では、学校種の違いによる割合の差は統計的に明瞭と推察される。そして、8項目のうち6項目で大学生が高値を示していた。したがって、大学生の方が中学生や高校生に比して、多面にわたって、強く期待を抱いていると考えられる。しかし、中学生と高校生との間には特徴的な傾向を見いだすことはできなかった。

3.1.1.2. 「演出に対する是非」について

本件は、8項目の演出を設定し、「よくない」と感じたこと○印をつける形式で実施した。なお、世界陸上を見なかった者にも、「もし、見たならば」と仮定して回答を求めた。この全体傾向と学校種による違いは表1（下段）に示す。

全体傾向をみると、上位項目は「話題性のある種目への偏重」や「特定の有名選手にばかり注目すること」であり、これらの演出を否定的に捉えていると考えられる。すなわち、特定の選手や種目に偏重した番組編成を嫌っていると推察される。しかし、実際の視聴率は話題性の高い種目や人気選手の出場する時に高値を示す。つまり、「演出に対する是非」と「実際の視聴行動」との関連は薄いと考えられる。とは言え、「人気のない選手や種目にも目を向けるべき」と考えていること自体は、好

ましい状況と言えるだろう。他方、下位項目、すなわち、比較的許容されている演出としては、「アナウンサーや解説者の絶叫」や「感動をあおるような「ドラマづくり」」といった項目が位置づいた。これらは競技関係者からは不評であるが、「興奮や感動を求める」という期待に誘引される傾向と推察される。

ところで、「選手に、愛称やニックネームをつけること」は最下位であり、かつ、65%近くの者が許容している演出であった。しかし、選手の身体的特徴に基づくネーミングは人権問題にかかる場合もある。また、女性選手に対する「美人」や「ちゃん」という呼称は、性差別との見方もある。したがって、このような状況は人権教育の側面での検討課題として提議できる。また、「選手のプライベートに触れること」や「疑似生放送（録画をライブのように報じる）」については、メディアの社会的責任を論じる立場から問題視されている演出であるが、ともに半数近くの者が許容していた。このような状況は、情報教育、特に「情報リテラシーの欠如」の側面から検討課題として提議できる。

次に、学校種による違いをみてみた（表1（下段・右側））。まず、内容（序列）の違いである。結果として、学校種ごとの序列は「似通っている」と考えられた。その上で、「若干の違い」を挙げるとすると、中学生と高校生で1位の「話題性のある種目への偏重」は、大学生では2位であった。また、中学生と高校生で2位の「特定の有名選手にばかり注目すること」は、大学生では4位であった。これらのことから、中学生や高校生の方が大学生に比して、若干ではあるが、特定の選手や種目に偏重した演出を嫌う傾向があると推察される。他方、大学生で1位の「無関係なタレントを登場させること」は、中学生では5位、高校生では3位であった。このことから、大学生の方が中学生や高校生に比して、若干ではあるが、スポーツの本質を遊離した演出を嫌う傾向があると推察される。

次に、程度（割合）の違いである。表記する結果のように、すべての項目において「学校種」と「選択一非選択」の変数間に関係があると考えられた。したがって、これらの項目では、学校種の違いによる割合の差は明瞭と推察される。しかし、例えば、スポーツの本質を遊離した演出である「選手のプライベートに触れる」は中学生が高値を、同じ趣意の「無関係なタレントを登場させる」は大学生が高値を示すなど、学校種による特徴的な傾向は見いだすことはできなかった。

3.1.2. 男女による違い

上記の分析により、学校種による違いが明確であったことから、男女による違いを学校種ごとに比較した。結果は表2に示す。

3.1.2.1. 「視聴に際する期待」について

表2（上段）に、学校種ごとに、「視聴に際する期待」の男女による違いを分析した結果を示した。まず、内容（序列）の違いである。結果として、いずれの比較対照群でも男女の序列は「似通っている」と考えられた。その上で、「若干の違い」が、中学生と高校生の「陸上競技に関する知識を得たい」と「その場にいるような雰囲気を感じたい」という2項目に表出していた。とともに、男子の方が「陸上競技に関する知識を得たい」が、女子の方が「その場にいるような雰囲気を感じたい」が上位であった。したがって、中学生や高校生では、男子は知識享受を求める傾向が、女子は感情的充足を求める傾向が、それぞれ若干強いと推察される。

次に、程度（割合）の違いである。表記する結果のように、中学生では5項目、高校生では7項目、大学生では4項目において「男女」と「選択一非選択」の変数間に関係があると考えられた。したがって、これらの項目では、男女の違いによる割合の差は明瞭と推察される。特徴的な結果として、「高度な競技能力を見たい」と「陸上競技に関する知識を得たい」は学校種に共通して男子の方が高値を、また、「感動をあじわいたい」は学校種に共通して女子の方が高値を示した。このことからも、内容

(序列) の視点と同様に、男子は知識享受を、女子は感情的充足を求める傾向があると推察される。

3.1.2.2. 「演出に対する是非」について

表2(下段)に、学校種ごとに、「演出に対する是非」の男女による違いを分析した結果を示した。

まず、内容(序列)の違いである。結果をみると、学校種を越えると男女の序列に「似通っていない」と考えられる比較対照群もあったが、各学校種内での男女の序列は「似通っている」と考えられた。学校種による違いは前記したため、ここでは男女差の「若干の違い」に着目する。すると、「選手に、愛称やニックネームをつける」という項目に表出し、学校種に共通して男子の方が上位にあり、この演出を否定的に捉えていると考えられた。

次に、程度(割合)の違いである。表記する結果のように、中学生では2項目、高校生では4項目、大学生では3項目において「男女」と「選択-非選択」の変数間に関係があると考えられた。したがって、これらの項目では、男女の違いによる割合の差は明瞭と推察される。特徴的な結果として、「選手に、愛称やニックネームをつける」は学校種に共通して男子の方が高値を示していた。すなわち、内容(序列)の視点と同様に、男子の方がこの演出を否定的に捉えていると考えられる。また、全体的に男子の方が高値を示していることから、演出そのものを否定的に捉えていると考えられる。言い換えれば、女子の方が演出を許容していることとなるが、これは前述したように、「女子は感情的充足を期待している」ということに誘引されていると推察される。

3.1.3. 陸上競技経験の有無による違い

前記と同様に、陸上競技経験の有無による違いを学校種ごとに比較した。結果は表3に示す。なお、今回は「陸上競技経験」を陸上競技部への所属状況で捉え、所属している者を「経験者」、それ以外を「非経験者」とした。

3.1.3.1. 「視聴に際する期待」について

表3(上段)に、学校種ごとに、「視聴に際する期待」の陸上競技経験の有無による違いを分析した結果を示した。

まず、内容(序列)の違いである。結果として、すべての比較対照群において、経験者と非経験者の序列は「似通っている」と考えられた。その上で、「若干の違い」が「陸上競技に関する知識を得たい」という項目に表出していた。各学校種とも経験者の方が上位に位置づいた。また、中学生と高校生では「試合の経過を正確に知りたい」が、大学生では「選手の個人データを知りたい」が、経験者の方が上位に位置づいた。これらのことから、陸上競技経験者ほど知識享受を求める傾向が、若干強いと推察される。

次に、程度(割合)の違いである。表記する結果のように、中学生では1項目、高校生では5項目、大学生では3項目において「陸上競技経験」と「選択-非選択」の変数間に関係があると考えられた。したがって、これらの項目では、陸上競技経験の違いによる割合の差は明瞭と推察されるが、いずれの項目も経験者の方が高値を示していた。このことから、陸上競技経験の有無による違いは、高校生に顕著に表出し、経験者ほど多様に強い期待を抱いて視聴していると考えられる。

3.1.3.2. 「演出に対する是非」について

表3(下段)に、学校種ごとに、「演出に対する是非」の陸上競技経験の有無による違いを分析した結果を示した。

まず、内容(序列)の違いである。結果として、学校種を越えると経験者と非経験者の序列に「似通っていない」と考えられる比較対照もあったが、各学校種内での経験者と非経験者の序列は「似通っている」と考えられた。そのなかで、「若干の違い」が「感動をあおるような「ドラマづくり」」

という項目に表出し、学校種に共通して非経験者の方が上位に位置づいた。意外であるが、非経験者の方がこれを否定していると考えられる。

次に、程度（割合）の違いである。表記する結果のように、中学生では2項目、高校生では2項目、大学生では5項目において「陸上競技経験」と「選択－非選択」の変数間に関係があると考えられた。したがって、これらの項目では、陸上競技経験の違いによる割合の差は明瞭と推察され、いずれの項目も経験者の方が高値を示していた。したがって、中学生や高校生では陸上競技経験の有無による違いはさほどないが、大学生では顕著になり、経験者の方が演出全般にわたって否定的に捉えていると考えられる。

3.2. 「視聴が青少年に及ぼす効果」について

前記の通り、「視聴が青少年に及ぼす効果」は「新知見の獲得」「情意の形成」「イメージの変化」の各側面に着目した。

3.2.1. 全体傾向と学校種による違い

表4に、「視聴が青少年に及ぼす効果」に関する全体傾向と学校種による違いの結果を示す。なお、上段に「新知見の獲得」の、中段に「情意の形成」の、下段に「イメージの変化」の結果を示した。

3.2.1.1. 「新知見の獲得」について

本件は、5項目の「陸上競技に関する知識」を設定し、新たに知った事項に○印をつける形式で測定した。この全体傾向と学校種による違いは表4（上段）に示す。

結果をみると、まず、「上記のいずれかが該当」と、何らかの新知見を獲得している者が46.6%と約半数であった。もちろん、そもそも多くの知見を有している者は、新知見を獲得する可能性が少ないことを踏まえれば、番組は青少年視聴者に対して新知見を獲得させるという機能を果たしていると考えることができるだろう。

しかし、「上記のすべてが該当」は7.3%であった。また、項目ごとにみると、最も高い割合は「戦術や運動技術について」の31.3%と、必ずしも、高値ではなかった。したがって、新知見を獲得させるという機能は果たしてはいるものの、充分とは言えない状況とも考えられる。

次に、学校種による違いをみてみた（表4（上段・右側））。まず、内容（序列）の違いである。結果として、学校種ごとの序列は「似通っている」と考えられた。その上で「若干の違い」を挙げると、「工業・科学技術について」と「歴史的なできごとについて」という項目に表出している。中学生では、前者が4位で後者が5位であったが、高校生と大学生では、前者が5位で後者が4位であった。しかし、全5項目の下位2項目の違いであり、特筆するような傾向とは考えられない。

次に、程度（割合）の違いである。表記する結果のように、「トレーニング方法について」を除く4項目において「学校種」と「選択－非選択」の変数間に関係があると考えられた。したがって、これらの項目では、学校種の違いによる割合の差は明瞭と推察され、いずれの項目も、中学生が突出して高値を示していた。このことから、陸上競技に関する新知見を獲得させる機能は、青少年全般に発しているものの、中学生に顕著と考えられる。もちろん、年齢が高まれば「既知」が多くなることから、高校生や大学生に対して「新知見の獲得」という機能が弱いことは、取り上げて問題視することとも言えない。

3.2.1.2. 「情意の形成」について

本件は、4項目の「スポーツや陸上競技に対する情意」を設定し、自身が感じた事項に○印をつける形式で測定した。この全体傾向と学校種による違いは表4（中段）に示す。

結果をみると、まず、「上記のいずれかが該当」と、何らかの情意を獲得している者が51.9%と約

半数であった。特に、「陸上競技のスポーツ番組をまた見たい」と「スポーツをしてみたい」は40%を超えていた。したがって、番組は青少年視聴者へスポーツなどに対する情意を形成する機能を果たしていると考えられる。しかし、「陸上競技の普及」という視点から期待される情意である、「陸上競技についてもっと知りたい」は25.2%、「陸上競技をしてみたい」は33.3%と、必ずしも高値と言えるものではなかった。

次に、学校種による違いをみてみた（表4（中段・右側））。まず、内容（序列）の違いである。結果として、学校種ごとの序列は「似通っている」と考えられた。また、中学生で「また見たい」と「スポーツをしてみたい」が同率1位であった以外は学校種ごとの序列は同じであり、特筆するような「若干の違い」はなかった。

次に、程度（割合）の違いである。表記する結果のように、全4項目において「学校種」と「選択一非選択」の変数間に関係があると考えられた。したがって、これらの項目では、学校種の違いによる割合の差は明瞭と推察され、いずれの場合も、中学生が突出して高値を示していた。また、高校生と大学生は同程度の値であった。これらのことから、このことから、スポーツや陸上競技に対する情意を形成する機能は、青少年全般に発しているものの、中学生に顕著と考えられる。なお、前項の「新知見の獲得」とは異なり、高校生や大学生であっても、本効果が生じて欲しいものである。もちろん、高校生や大学生でも40%台の値であり、けっして低値とは言えないが、さらに高揚させる策を講じる必要が示唆される。

3.2.1.3. 「イメージの変化」について

本件は、3項目の「陸上競技に対するイメージ」を設定し、変化が生じた事項に○印をつける形式で測定した。この全体傾向と学校種による違いは表4（下段）に示す。なお、先述のように「好ましい変化」の言及は難しく、今回は「イメージの変化を生じさせたか否か」に着目した。

結果をみると、まず、「上記のいずれかが該当」と、何らかのイメージ変化を生じさせた者が60.2%であった。特に、「おもしろい一つまらない」は47.3%と、約半数の者がイメージ変化を生じさせていた。したがって、番組は青少年視聴者に対して陸上競技のイメージを変化させる機能を果たしていると考えられる。

次に、学校種による違いをみてみた（表4（下段・右側））。まず、内容（序列）の違いである。結果として、すべての学校種とも、同じ序列であった。また、程度をみると、表記する結果のように、全3項目において「学校種」と「選択一非選択」の変数間に関係があると考えられた。したがって、これらの項目では、学校種の違いによる割合の差は明瞭と推察され、いずれの場合も、中学生が突出して高値を示していた。とりわけ、「上記のいずれかが該当」については、高校生や大学生も50%を超えたが、中学生では70.2%と大多数であった。

これらのことから、学校種に関わらず、番組は青少年の陸上競技に対するイメージを変化させる機能を有し、特に、中学生に対しては顕著であると考えられる。

3.2.2. 男女による違い

これまでと同様に、男女による違いを学校種ごとに比較した。結果は表5に示す。

3.2.2.1. 「新知見の獲得」について

表5（上段）に、学校種ごとに、「新知見の獲得」の男女による違いを分析した結果を示した。

まず、内容（序列）の違いである。すべての比較対照群で、序列は「似通っている」と考えられた。また、序数が「2」以上違う項目はなく、しいて挙げる「若干の違い」もないと考えられる。

次に、程度（割合）の違いである。表記する結果のように、中学生では2項目と「上記のいずれか

が該当」に、高校生では1項目と「上記のすべてが該当」と「上記のいずれかが該当」において、「男女」と「選択一非選択」の変数間に関係があると考えられた。したがって、これらの項目では、男女の違いによる割合の差は明瞭と推察され、いずれの場合も、男子の方が高値を示していた。

これらのことから、男女の間に内容的な違いは少ないが、特に少年期（中学生や高校生）において、男子の方が「新知見の獲得」という機能を享受していると考えられる。

3.2.2.2. 「情意の形成」について

表5（中段）に、学校種ごとに、「情意の形成」の男女による違いを分析した結果を示した。

まず、内容（序列）の違いである。結果として、すべての比較対照群で、序列は「似通っている」と考えられた。また、比較対照群によって「また見たい」と「してみたい」の序列が入れ替わっている程度の違いで、しいて挙げる「若干の違い」もないと考えられる。

次に、程度（割合）の違いである。表記する結果のように、中学生では3項目と「上記のすべてが該当」および「上記のいずれかが該当」に、高校生では3項目と「上記のいずれかが該当」において、「男女」と「選択一非選択」の変数間に関係があると考えられた。したがって、これらの項目では、男女の違いによる割合の差は明瞭と推察され、いずれの場合も、男子の方が高値を示していた。

これらのことから、「新知見の獲得」と同様に、男女の間に内容的な違いは少ないが、特に少年期（中学生や高校生）において、男子の方が「情意の形成」という機能を享受していると考えられる。

3.2.2.3. 「イメージの変化」について

表5（下段）に、学校種ごとに、「イメージの変化」の男女による違いを分析した結果を示した。

まず、内容（序列）の違いである。順位をみると、すべての比較対照群で、序列は同じであった。次に、程度（割合）の違いである。表記する結果のように、中学生では2項目と「上記のいずれかが該当」に、高校生では1項目と「上記のすべてが該当」および「上記のいずれかが該当」において、「男女」と「選択一非選択」の変数間に関係があると考えられた。したがって、これらの項目では、男女の違いによる割合の差は明瞭と推察され、いずれの場合も、男子の方が高値を示していた。

これらのことから、前記の2項と同様に、男女の間に内容的な違いはないが、特に少年期（中学生や高校生）において、男子の方が「イメージの変化」という機能を享受していると考えられる。

3.2.3. 陸上競技経験の有無による違い

これまでと同様に、学校種ごとに、陸上競技経験の有無による違いを検証した。結果は表6に示す。

3.2.3.1. 「新知見の獲得」について

表6（上段）に学校種ごとに、「新知見の獲得」の陸上競技経験の有無による違いを分析した結果を示した。

まず、内容（序列）の違いである。結果として、すべての比較対照で、経験者と非経験者の序列は「似通っている」と考えられた。また、陸上競技経験の有無間で序数が「2」以上違う項目はなく、しいて挙げる「若干の違い」もないと考えられる。次に、程度（割合）の違いであるが、表記する結果のように、すべての項目において、「陸上競技経験」と「選択一非選択」の変数間には関係がないと考えられた。

これらのことから、「新知見の獲得」について、陸上競技経験による違いはほとんどないと考えられる。

3.2.3.2. 「情意の形成」について

表6（中段）に学校種ごとに、「情意の形成」の陸上競技経験の有無による違いを分析した結果を示した。

まず、内容（序列）の違いである。すべての比較対照で、経験者と非経験者の序列は「似通っている」と考えられた。また、中学生男子の「また見たい」と「してみたい」の序列が他の対照群と入れ替わっている程度の違いであり、しいて挙げる「若干の違い」もないと考えられる。次に、程度（割合）の違いである。表記する結果のように、高校生の1項目と「上記のいずれかが該当」において、「陸上競技経験」と「選択－非選択」の変数間に関係があると考えられた。したがって、これらの項目では、陸上競技経験の有無による割合の差は明瞭と推察され、いずれの場合も、陸上競技経験者の方が高値であった。しかし、全体を見れば、経験者と非経験者の間に明瞭な差がある場合は少なく、陸上競技経験者の方が情意を形成していると考えるには至らない結果である。

これらのことから、「情意の形成」について陸上競技経験の有無による違いはほとんどないと考えられる。

3.2.3.3. 「イメージの変化」について

表6（下段）に学校種ごとに、「イメージの変化」の陸上競技経験の有無による違いを分析した結果を示した。

まず、内容（序列）の違いである。結果として、すべての比較対照群で、経験者と非経験者の序列は「似通っている」と考えられた。また、中学生男子の「派手－地味」が「複雑－単純」と同率2位であったことが他の比較対照群と異なる程度の違いであり、しいて挙げる「若干の違い」もないと考えられる。次に、程度（割合）の違いである。表記する結果のように、中学生では1項目と「上記のすべてが該当」に、高校生では1項目と「上記のいずれかが該当」において、「陸上競技経験」と「選択－非選択」の変数間に関係があると考えられた。したがって、これらの項目では、陸上競技経験の有無による割合の差は明瞭と推察されるが、一貫した傾向ではなく、陸上競技経験の有無との関連を説明することは難しい。

ともあれ、これらのことから、「イメージの変化」について、陸上競技経験の有無による違いはほとんどないと考えられる。

4. まとめ

4.1. 要 約

昨今、各テレビ局はスポーツ番組の放送に際し、過度な演出をするようになった。この演出に対して、スポーツ界からはスポーツ文化の健全性に影響する懸念の声があるが、他方、多くの視聴者を獲得したスポーツ種目では社会的注目度が高まり、当該スポーツ種目界全体にさまざまな便益をもたらしている。したがって、テレビ局による演出を一概に批判することもできない。それならば、仮に、スポーツ番組が青少年に悪影響を与えていたならば、体育・スポーツ指導によって修正するほかなく、もちろん、効果があるならば、それを効率的に誘引るべきである。

このような問題意識から、その原点となる「スポーツ番組が青少年に及ぼしている影響」について、「青少年がスポーツ番組をどのように捉えているか」と「スポーツ番組が青少年に及ぼす効果」という側面から現状把握を行うため、アンケート調査を実施した。なお、アンケート調査は「世界陸上」の放送に着目した。本番組は過度な演出に競技関係者から苦言が聞かれる一方、視聴率は20%前後と高値を保持しており、陸上競技の社会的注目度を向上させたことも明白である。したがって、視聴者への影響が懸念される状況下にある。

アンケート調査は、首都圏にある学校に在籍する中学生、高校生、大学生を対象とし、各学校の教員の協力のもと手渡しによって配布し、主に郵送によって回収した。2005年9月～11月に配布と回収

を行った結果、4300 部の配布に対し 2116 部の回答が得られた（回収率は 49.2%）。

その結果、以下のような知見が得られた。

まず、テレビ放送がスポーツ文化に及ぼす悪影響を「青少年がスポーツ番組をどのように捉えているか」という側面から推察したところ、感動や興奮を求めて視聴する者は多いが、スポーツの技術体系や発展過程などを堪能する鑑賞的視聴をする者は少ないことが明らかになった。また、競技関係者から不評な大げさな演出も多数が許容していた。これらのことから、スポーツ番組におけるエンターテイメント要素への偏重が問題提議される。また、スポーツ文化への悪影響ではないが、「情報教育」「人権教育」「道徳教育」の側面から問題視すべき状況も明らかになった。

他方、「スポーツ番組が青少年に及ぼす効果」としては、「新知見の獲得」「情意の形成」「イメージの変化」の各側面に着目したが、いずれも半数以上の者に何らかの効果が生じていると考えられた。しかし、「新知見の獲得」についてはルールや運動技術に関する知見以外への効果が弱いこと、「情意の形成」については陸上競技の普及に直結する情意への効果が弱いことなど、効果が行き渡っていない部分も明らかになった。また、学校種や性別といった個人属性によって効果の発生状況が異なり、中学生や高校生に比して大学生が、男子に比して女子の方が、それぞれ効果の発生が弱いことも明らかになった。

4.2. 今後の検討課題

今回のアンケート調査では、スポーツ番組が青少年に及ぼす影響の現状把握を主眼とした。しかし、筆者の最終的な目的は、この結果に基づき、悪影響を与えていたならば修正策を、効果を発しているならば誘引策を講じることである。

さて、今回の調査によって、スポーツ番組は青少年にさまざまな効果を及ぼしていることが明らかになった。したがって、例えば、「どのような見方をした視聴者に効果が生じているのか」を検証することで「効率的な誘引策」を講じることができる。もちろん、効果の行き渡っていない部分、すなわち、効果が生じなかつた人に目を向け、「何故、効果が生じなかつた」や「如何にすれば効果が生じるのか」を講じることも必要であろう。

さらに、「情報教育」「人権教育」「道徳教育」の側面から問題視すべき状況が明らかになったことから、スポーツ番組を利用して、これらの教育効果を発する方策を講じることも必要である。特に、本件については、「手段論」と呼ばれ「スポーツによる教育」の方法論について新たな研究視座を提示することになる。

5. 参考文献

- 1) 橋本純一・編 (2001) 現代メディアスポーツ論, 世界思想社, Pp. 306.
- 2) 広瀬一郎 (1997) メディアスポーツ, 読売新聞社, Pp. 229.
- 3) 井上泰浩 (2004) メディア・リテラシー, 日本評論社, Pp. 229.
- 4) 神原直幸 (2001) メディアスポーツの視点, 学文社, Pp. 203.
- 5) 三井宏隆・篠田潤子 (2004) スポーツ・テレビ・ファンの心理学, ナカニシヤ出版, Pp. 154.
- 6) 文部省競技スポーツ研究会・編 (1996) 「みるスポーツ」の振興, ベースボールマガジン社, Pp. 295.
- 7) 中村敏雄・編 (1995) メディアスポーツの見方、考え方, 創文企画, Pp. 243.
- 8) 日本民間放送連盟 (2005) メディアリテラシーの道具箱, 東京大学出版会, Pp. 209.
- 9) 内海和雄 (2001) プロ・スポーツ論: スポーツ文化の開拓者, 創文企画, Pp. 213.
- 10) 渡辺武雄 (1997) メディア・リテラシー, ダイヤモンド社, Pp. 196.

表1 「スポーツ番組の捉え方」:全体傾向と学校種による違い

スポーツ番組の捉え方	全体			中学生			高校生			大学生			検定
	序列		割合	実数	序列		割合	実数	序列		割合	実数	
	序列	割合	実数	序列	割合	実数	序列	割合	実数	序列	割合	実数	
観戦に際する期待													
1. 試合の経過を正確に知りたい、	4	60.2	1273	4	59.0	377	4	59.0	693	4	67.2	203	*
2. 高度な競技能力を見たい、	2	67.4	1427	2	71.8	459	2	63.9	751	2	71.9	217	**
3. 予想できない劇的シーンを見たい、	1	73.3	1551	1	77.0	492	1	72.7	854	3	67.9	205	**
4. 選手の個人データを知りたい、	6	35.0	741	8	33.2	212	6	33.3	391	6	45.7	138	***
5. 選手の人ががらや人物像が知りたい、	8	29.9	633	9	29.3	187	8	27.7	325	7	40.1	121	***
6. 陸上競技に関する知識を得たい、	9	28.4	602	7	33.3	213	9	25.0	294	9	31.5	95	***
7. その場にいるような雰囲気を感じたい、	7	33.5	709	6	35.5	227	7	31.7	373	8	36.1	109	
8. テレビなどでほの場面を見たい、	5	48.9	1034	5	51.3	328	5	46.3	544	5	53.6	162	*
9. 感動をあじわいたい、	3	63.9	1352	3	63.4	405	3	62.0	728	1	72.5	219	**
10. 競技シーンの他、セレモニーも見たい、	10	17.0	359	10	18.5	118	10	15.3	180	10	20.2	61	
演出に対する是非													
1. 選手のプライベートに触れる	4	54.5	1154	3	61.5	393	4	52.2	613	5	49.0	148	***
2. 特定の有名選手にばかり注目する	2	62.3	1319	2	64.3	411	2	63.3	744	4	54.3	164	**
3. 無関係なタレントを登場させる	3	57.7	1221	5	56.3	360	3	56.8	667	1	64.2	194	*
4. アナウンサーや解説者の絶叫	6	38.1	807	6	43.5	278	6	34.1	401	6	42.4	128	***
5. 選手に愛称やニックネームをつける	8	35.3	748	8	40.2	257	8	32.3	379	8	37.1	112	**
6. 話題性のある種目への偏重	1	70.7	1495	1	72.3	462	1	72.1	847	2	61.6	186	**
7. 疑似生放送(録画をライブのように報じる)	5	53.3	1127	4	57.0	364	5	50.8	597	3	55.0	166	*
8. 感動をおおるような「ドラマづくり」	7	37.3	790	7	42.6	272	6	34.1	401	7	38.7	117	**

注意) 「学校種」と「選択－非選択」の関係を検定した結果について、選択者の測定値と検定結果のみを記した(非選択者の割合は100%から選択者の割合を減じた値となる)。

*印は危険率を示し、 * p<0.05 ** p<0.01 *** p<0.001 を表す。

表2 「スポーツ番組の捉え方」:男女による違い

スポーツ番組の捉え方	中学生		高校生		大学生		
	男子		女子		男子		
	序列割合	実数	序列割合	実数	序列割合	実数	
視聴に際する期待							
1. 試合の経過を正確に知りたい	4	58.4	173	4	59.5	204	3
2. 高度な競技能力を見たい	2	77.4	229	2	67.1	230 **	2
3. 予想できない劇的シーンを見たい	1	78.7	233	1	75.5	259	1
4. 選手の個人データを知りたい	7	37.8	112	8	29.2	100 *	6
5. 選手の人がらや人物像が知りたい	8	28.0	83	7	30.3	104	8
6. 陸上競技に関する知識を得たい	6	39.9	118	9	27.7	95 **	7
7. その場にいるような緊張感を感じたい	9	27.4	81	6	42.6	146 ***	9
8. テレビならではの場面を見たい	5	53.4	158	5	49.6	170	5
9. 感動をあじわいたい	3	59.5	176	3	66.8	229 *	4
10. 競技シーンの他、セレモニーも見たい	10	17.6	52	10	19.2	66	10
演出に対する是非							
1. 選手のプライベートに触れる	2	64.5	191	3	58.9	202	4
2. 特定の有名選手にばかり注目する	2	64.5	191	2	64.1	220	2
3. 無関係なタレントを登場させる	5	59.8	177	5	53.4	183	3
4. アナウンサーや解説者の絶叫	8	44.6	132	6	42.6	146	7
5. 選手に愛称やニックネームをつける	6	46.6	138	8	34.7	119 ***	6
6. 話題性のある種目への偏重	1	72.0	213	1	72.6	249	1
7. 疑似生放送(録画をライブのように報じる)	4	60.8	180	4	53.6	184 *	5
8. 感動をあおるような「ドラマづくり」	7	45.3	134	7	40.2	138	8

注意) 学校種ごとに「男女」と「選択—非選択」の関係を検定した結果について、選択者の測定値と検定結果のみを記した(非選択者の割合は100%から選択者の割合を減じた値となる)。

*印は危険率を示し、 * p<0.05 ** p<0.01 *** p<0.001 を表す。

表3 「スポーツ番組の捉え方」：陸上競技経験による違い

スポート番組の捉え方	中学生				高校生				大学生			
	経験者		非経験者		経験者		非経験者		経験者		非経験者	
	序列割合	実数	序列割合	実数	序列割合	実数	序列割合	実数	序列割合	実数	序列割合	実数
視聴に際する期待												
1. 試合の経過を正確に知りたい	3	64.4	38	4	59.2	328	3	74.2	72	4	58.3	560 ***
2. 高度な競技能力を見たい	2	76.3	45	2	72.2	400	1	81.4	79	2	63.4	609 ***
3. 予想できない劇的シーンを見たい	1	81.4	48	1	76.9	426	2	78.4	76	1	72.6	697
4. 選手の個人データを知りたい	7	42.4	25	7	32.7	181	7	50.5	49	6	32.7	314 ***
5. 選手の人がらや人物像が知りたい	9	28.8	17	9	30.0	166	9	25.8	25	8	29.1	279
6. 陸上競技に関する知識を得たい	6	47.5	28	8	32.3	179 *	6	54.6	53	9	23.3	224 ***
7. その場にいるような緊張感を感じたい	8	35.6	21	6	35.9	199	8	35.1	34	7	31.6	303
8. テレビならではの場面を見たい	5	57.6	34	5	50.4	279	5	62.9	61	5	45.5	437 **
9. 感動をあじわいたい	4	62.7	37	3	63.5	352	4	69.1	67	3	61.9	594
10. 競技シーンの他、セレモニーも見たい	10	25.4	15	10	17.5	97	10	16.5	16	10	15.1	145
演出に対する是非												
1. 選手のプライベートに触れる	2	64.4	38	3	61.4	340	5	50.5	49	4	52.1	500
2. 特定の有名選手にばかり注目する	3	61.0	36	2	64.8	359	3	62.9	61	2	62.7	602
3. 無関係なタレントを登場させる	4	57.6	34	5	56.9	315	2	63.9	62	3	56.5	542
4. アナウンサーや解説者の絶叫	7	40.7	24	6	44.2	245	6	42.3	41	7	33.0	317 *
5. 選手に愛称やニックネームをつける	6	47.5	28	8	39.5	219	7	39.2	38	8	31.6	303
6. 話題性のある種目への偏重	1	83.1	49	1	72.2	400 *	1	79.4	77	1	71.8	689
7. 疑似生放送(録画をライブのように報じる)	5	52.5	31	4	57.8	320	4	59.8	58	5	50.3	483 *
8. 感動をあおるような「ドラマづくり」	8	30.5	18	7	43.1	239 *	8	35.1	34	6	34.4	330

注意) 学校種ごとに「陸上競技経験」と「選択一非選択」の関係を検定した結果について、選択者の測定値と検定結果のみを記した(非選択者の割合は100%からの選択者の割合を減じた値となる)。

印は危険率を示し、 p<0.05 ** p<0.01 *** p<0.001 を表す。

表4 「視聴が青少年に及ぼす効果」:全体傾向と学校種による違い

	視聴が青少年に及ぼす効果	全 体				中学生				高校生				大学生			
		序列		割合		実数		序列		割合		実数		序列		割合	
		序列	割合	実数	序列	割合	実数	序列	割合	実数	序列	割合	実数	序列	割合	実数	序列
新知見の獲得																	
1. ルールについて	2	28.1	322	2	37.0	143	2	23.7	136	2	23.4	43	43	***			
2. 戰術や運動技術について	1	31.3	358	1	38.9	150	1	27.7	159	1	26.6	49	49	***			
3. 工業・科学技術について	5	16.8	192	4	24.1	93	5	14.1	81	5	9.8	18	18	***			
4. トレーニング方法について	3	24.3	278	3	28.2	109	3	23.1	133	3	19.6	36	36	***			
5. 歴史的なできごとにについて	4	17.9	205	5	22.0	85	4	17.4	100	4	10.9	20	20	**			
上記のすべてが該当	7.3	84		13.0	50		5.7	33		0.5	1	1	1	***			
上記のいずれかが該当	46.6	533		56.7	219		40.9	235		42.9	79	79	79	***			
情意の形成																	
1. 陸上についてもつと知りたい	4	25.2	288	4	34.5	133	4	21.0	121	4	18.5	34	34	***			
2. 陸上をまた見たい	2	41.0	469	1	53.6	207	2	34.6	199	2	34.2	63	63	***			
3. 陸上をしてみたい	3	33.3	381	3	45.6	176	3	26.3	151	3	29.3	54	54	***			
4. スポーツをしてみたい	1	44.7	512	1	53.6	207	1	40.0	230	1	40.8	75	75	***			
上記のすべてが該当	16.9	193		23.8	92		12.9	74		14.7	27	27	27	***			
上記のいずれかが該当	51.9	594		63.7	246		44.9	258		48.9	90	90	90	***			
イメージの変化																	
1. 複雑 - 単純	2	34.9	400	2	43.3	167	2	30.8	177	2	30.4	56	56	***			
2. 派手 - 地味	3	27.1	310	3	36.5	141	3	21.4	123	3	25.0	46	46	***			
3. おもしろい - つまらない	1	47.3	542	1	58.3	225	1	41.0	236	1	44.0	81	81	***			
上記のすべてが該当	18.1	207		27.5	106		14.1	81		10.9	20	20	20	***			
上記のいずれかが該当	60.2	689		70.2	271		54.3	312		57.6	106	106	106	***			

注意) 「学校種」と「選択-非選択」の関係を検定した結果について、選択者の測定値と検定結果のみを記した(非選択者の割合は100%から選択者の割合を減じた値となる)。

*印は危険率を示し、 * p<0.05 ** p<0.01 *** p<0.001 を表す。

表5 「視聴が青少年に及ぼす効果」:男女による違い

視聴が青少年に及ぼす効果	中学生				高校生				大学生			
	男子		女子		男子		女子		男子		女子	
	序列	割合	実数	序列	割合	実数	序列	割合	実数	序列	割合	実数
新知見の獲得												
1. ルールについて	1	43.4	82	2	31.0	61 **	2	28.9	84	3	18.3	52 **
2. 戰術や運動技術について	2	42.9	81	1	35.0	69	1	29.6	86	1	25.7	73
3. 工業・科学技術について	4	25.4	48	4	22.8	45	5	15.8	46	5	12.3	35
4. トレーニング方法について	3	33.3	63	3	23.4	46 *	3	25.8	75	2	20.4	58
5. 歴史的なできごとにについて	4	25.4	48	5	18.8	37	4	18.2	53	4	16.5	47
上記のすべてが該当	14.8	28		11.2	22		7.9	23		3.5	10 *	
上記のいずれかが該当	64.6	122		49.2	97 **		44.7	130		37.0	105 *	
情意の形成												
1. 陸上についてもつと知りたい	4	39.7	75	4	29.4	58 *	4	24.1	70	4	18.0	51 *
2. 陸上をまた見たい	1	60.3	114	2	47.2	93 **	2	33.7	98	1	35.6	101
3. 陸上をしてみたい	3	50.3	95	3	41.1	81 *	3	30.6	89	3	21.8	62 *
4. スポーツをしてみたい	2	56.1	106	1	51.3	101	1	45.4	132	2	34.5	98 **
上記のすべてが該当	31.7	60		23.4	46 *		15.8	46		12.3	35	
上記のいずれかが該当	76.2	144		64.5	127 **		57.7	168		50.7	144 *	
イメージの変化												
1. 複雑－単純	2	48.1	91	2	38.6	76 *	2	33.7	98	2	27.8	79
2. 派手－地味	1	39.7	75	1	33.5	66	1	25.4	74	1	17.3	49 *
3. おもしろい－つまらない	3	64.0	121	3	52.8	104 *	3	44.3	129	3	37.7	107
上記のすべてが該当	27.5	52		20.3	40		15.5	45		10.2	29 *	
上記のいずれかが該当	68.8	130		58.9	116 *		48.8	142		40.8	116 *	

注意) 学校種ごとに「男女」と「選択－非選択」の関係を検定した結果について、選択者の測定値と検定結果のみを記した(非選択者の割合は100%から選択者の割合を減じた値となる)。

*印は危険率を示し、 * p<0.05 ** p<0.01 *** p<0.001 を表す。

表6 「視聴が青少年に及ぼす効果」：陸上競技経験の有無による違い

視聴が青少年に及ぼす効果	中学生				高校生				大学生			
	経験者		非経験者		経験者		非経験者		経験者		非経験者	
	序列	割合	実数	序列	割合	実数	序列	割合	実数	序列	割合	実数
新知見の獲得												
1. ルールについて	1	38.8	19	2	37.5	122	1	27.2	22	3	23.2	107
2. 戰術や運動技術について	1	38.8	19	1	39.7	129	2	24.7	20	1	28.9	133
3. 工業・科学技術について	4	16.3	8	4	25.5	83	5	12.3	10	5	15.2	70
4. トレーニング方法について	3	28.6	14	3	28.6	93	3	23.5	19	2	24.1	111
5. 歴史的なできごとにについて	5	14.3	7	5	24.0	78	4	19.8	16	4	17.6	81
上記のすべてが該当	8.2	4	14.2	46	3.7	3	6.5	30	5.3	1	4	12.3
上記のいずれかが該当	59.2	29	56.9	185	45.7	37	40.6	187	36.8	7	43.9	68
情意の形成												
1. 陸上についてもつと知りたい	4	26.5	13	4	36.3	118	4	23.5	19	4	20.8	96
2. 陸上をまた見たい	1	49.0	24	2	55.1	179	2	34.6	28	2	35.8	165
3. 陸上をしてみたい	3	36.7	18	3	47.4	154	3	32.1	26	3	26.0	120
4. スポーツをしてみたい	2	46.9	23	1	55.1	179	1	54.3	44	1	38.4	177 **
上記のすべてが該当	20.4	10	28.9	94	12.3	10	15.0	69	5.3	1	12.3	19
上記のいずれかが該当	69.4	34	71.1	231	64.2	52	53.6	247 *	63.2	12	57.4	89
イメージの変化												
1. 複雑－単純	2	34.7	17	2	44.6	145	2	34.6	28	2	31.2	144
2. 派手－地味	2	34.7	17	3	37.2	121	3	27.2	22	3	21.0	97
3. おもしろい－つまらない	1	46.9	23	1	60.3	196 *	1	55.6	45	1	39.3	181 **
上記のすべてが該当	14.3	7	25.5	83 *	16.0	13	12.8	59	5.3	1	16.1	25
上記のいずれかが該当	55.1	27	65.2	212	59.3	48	43.4	200 **	42.1	8	49.7	77

注意) 学校種ごとに「陸上競技経験」と「選択一非選択」の関係を検定した結果について、選択者の割合と検定結果のみを記した(非選択者の割合は100%から選択者の割合を減じた値となる)。
 *印は危険率を示し、 * p<0.05 ** p<0.01 *** p<0.001 を表す。